こうが
2018年発足～絶賛進行形　VOL.1

人福祉・動物福祉協働会議

多頭飼育の問題を地域の問題として
～動物も人も救いたい～

【経緯】多頭飼育崩壊となり、行政とNPOが協力して動いた２つの事例をきっかけに、滋賀県動物愛護推進員の呼びかけにより、2018年4月から本格的に官民連携の緩やかな合議体で月に1回の会議を持っています。
【メンバー】動物愛護推進員、動物愛護ボランティアLOVE＆PEACE Pray,甲賀市役所生活環境課、福祉医療政策課、障害福祉課、地域包括支援センター、甲賀市社会福祉協議会、滋賀県動物保護管理センターと関心のある方には、どんどん参加してもらっています。

【内容】
・現状の共有と課題抽出
・事例検討会
・研修会企画
・予防策の検討
・啓発活動の検討

【方針】「他者を責めずに、それぞれの得意分野を持ち寄る」をモットーにし、多頭飼育の背後には、支援を必要としている人がいるのではないか、防ぐことができるのではないか、人と動物の両方へのアプローチを模索しています。
軽んじられる命はありません。全ての人や生き物が大切にされる、認め合える地域社会を目指しています。

ぼくたちのことをもっと知ってニャー
どんどん増えるで編

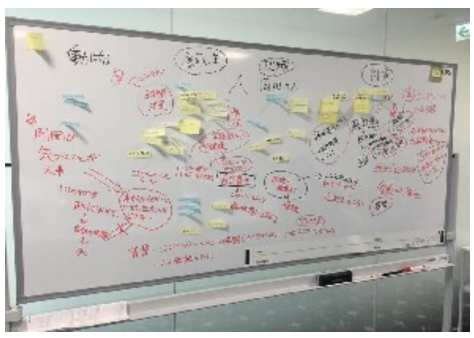
１年に３～４回、
１回に４～８匹産みます。

１年後　20頭以上
2年後、80頭以上

3年後はなんと
2000頭以上！

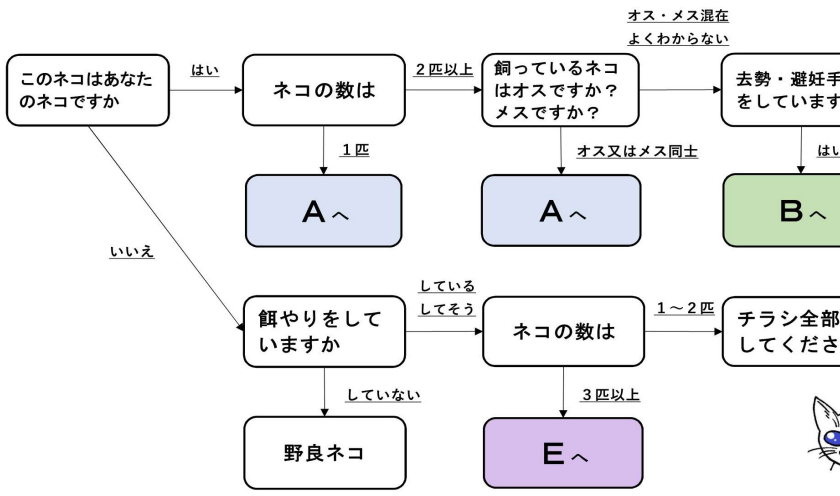
フローチャートづくり

核家族、高齢者の一人暮らし、単身世帯が増えるなか、「ペットを飼う」指向は増えることが予測されます。「多頭飼育」という言葉は社会問題と意識されてきても、「適切な飼い方」「地域にいる動物たちとの関わり方」について無知であったり、困っているとの声も聞きます。そこで、「どのように対応すればよいか」のフローチャーを作成し、必要に応じて4種類のちらし「ぼくたちのことをもっと知ってニャー」をお渡しできる流れを作ってみました。



これって多頭飼育崩壊!?早わかりフローチャート

・このフローチャートを使うことで、多頭飼育崩壊危険度がわかります。
・崩壊となる手前で、進行を止めるための啓発や関係機関に相談することが大切です。



？地域猫活動？
活動する地域の自治会等の了承を得た上で、住民またはボランティアなどが、飼い主のいない猫に不妊去勢手術を行い、その猫を適正に管理する活動のことです。地域猫活動の取り組みには、県で補助金制度があります。

？多頭飼育崩壊？
無計画に動物を飼育した結果、飼い主の予想を超えて繁殖し、飼育、管理ができなくなる状態になることです。世話をしきれない動物により家の中は不衛生になり、動物も人も劣悪な生活環境で生活することとなるほか、飼育費用の増大により、経済的に破綻し、状況を解決できない状態となってしまいます。

A：崩壊危険度：低
去勢・不妊手術をしていない場合は外へ出たときに妊娠する（させる）可能性があるので、手術を勧めてください。（チラシ①、③）

B：崩壊危険度：低
見守りを続けてください。

C：崩壊危険度：中～大
ネコの管理ができなくなると爆発的に増える可能性があるので、去勢・不妊手術を勧めてください。他で産んでいたり、飼い主が頭数管理できていない場合があるので、定期的な見守りをしてください。（チラシ全部）

D：崩壊危険度：大
放っておくと多頭飼育崩壊につながります。
去勢・避妊手術を勧めるとともに、現状確認、飼い方指導が必要になりますので、下記連絡先へご相談ください。（チラシ全部）

E：地域猫対策事業の対象となる場合があります。
詳しくは下記連絡先へお問い合わせください。

連絡先：甲賀市役所　生活環境課　６９－２１４４・福祉医療政策課　６９－２１５５

編集・デザイン：こうが人福祉・動物福祉協働会議

民生児童委員・ケアマネジャー合同研修会

支援を必要とする高齢者、認知症の方、何らかの発達特性を持つ方々が「不適切な飼育」であったりする現状は少なくはありません。そのような方々へ日々支援していただいているケアマネジャー(介護支援専門員)と地域の民生・児童委員さんへ2019年2月に研修会を持ちました。(ケアマネジャー8名、民生児童委員33名)
前半は当会からの事例や話題提供、後半では、グループに分かれてもらい、「地域で困っている動物のこと」を話し合ってもらい、情報共有を行いました。
地域での発見、対応いただくケアマネジャーや民生委員さんと意見交換できる有意義な時間でした。

出された意見

・今まで他人事のように思っていたけど、深刻な問題だと考え直した
・飼っている本人は寂しくて飼っている現実もあるので、意識改革はむずかしい
・多頭飼育の解決だけではなく、人の福祉の関りの中で、どう考えるかの視点が大切。心がけ主義で終わってはいけない
・飼育している人のことも考えるとほってはおけない
・相談窓口や対応してくれる機関があることを知れて良かった
・地域のつながりで多頭飼育の予防策になれればよいと思う。

2021年度は

当協働会議が発足し、4年目となり、社会的にも多頭飼育問題を多機関で取り組む重要性が大きくなってきているようです。一つ一つの事例の振り返り、システムづくり、市民さんにわかりやすい啓発に力を入れていきます。
コロナ禍ということもあり、啓発にはケーブルテレビなどを活用していきます。 お楽しみに！
また滋賀県が環境省「多頭飼育対策推進モデル事業」に参画され、当会も甲賀市の担当課と共に検討会に参加し、当会の取り組みが全国のモデルとなることをめざします。

甲賀市内ケアマネジャーに聞きました。　2021年1月アンケート実施

自宅でのサービス提供支援とペットの実態

【調査の目的】高齢者の日々の在宅支援を行う介護支援専門員(ケアマネジャー)が抱えている動物の問題を把握して多頭飼育問題のおそれのある事案を探知することが目的です。当協働会議では、自由記載のあった事案については、担当ケアマネジャーと共に適切な飼い方でないと思われる高齢者や家族に焦点を当てて事例検討を行い、背景、実態、課題を話し合いました。

【方法】
実施方法：自記式アンケート調査
対象者：甲賀市内　居宅介護支援事業所の介護支援専門員(ケアマネジャー)
調査時期：令和3年1月
回収：令和3年2月 49名から回答

【結果】（抜粋です。）

問　利用者がペットを複数匹飼っていたり、多種のペットを飼っていたりしたことがありますか。

・ある　25名　　・なし　24名

問　訪問して、動物の臭いで気になったことがありますか。

・ある　30名　　・なし　19名

問　利用者の介護サービス支援でこれまでに困ったことは何件くらいありますか

・1件　5名　・2件　9名　・3件　4名
・4件　1名　・10件　1名　・非該当　28名

問　どのようなことで困りましたか

・訪問時のペットの対処　15名
・利用者の入院や入所後のペットをどうするか　9名
・その他　9名　　・無回答 2名　　・非該当　27名

困った！ケアマネジャーの声(自由記載より)

ゲージに入れるよう依頼しても、本人夫婦が勝手に出してしまい、宅配弁当の配達員の手をかんだ。

ベットの上で出産する、糞尿がひどいなど猫の世話ができておらず、本人夫婦の生活に支障があった。

犬:独居・高齢者世帯の方が、要介護状態となり、散歩やそのほかのお世話が困難だった。(金銭的余裕はない)

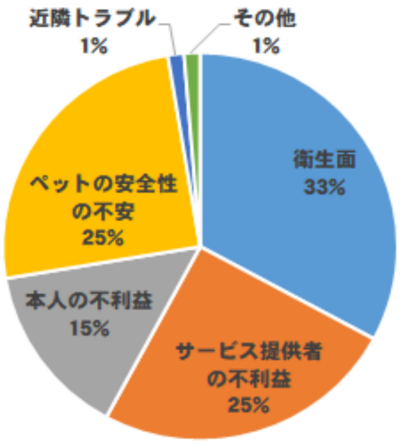
主な困りごとはノミとダニ。要介護・母親の皮膚疾患の悪化が見られた。

認知症の2人暮らしで妻がなくなり、夫が施設に入り、犬の世話をする人がいなかった。

利用者本人のお弁当を猫が食べていた。

猫の多頭により、ケア中も　猫が走りまわっていた。猫の糞尿が床にあちこちあった。

ケアスタッフが猫にかまれた。ケアスタッフに湿疹が出た。



グラフ：自由記載をさらにカテゴリーに分類

【事例検証】

事例1　70歳代夫婦、困窮世帯。妻が夫のために犬をもらってきたが、妻の入院により犬の世話ができなくなり、家のなかが汚くなり、皮膚疾患のある夫の皮膚を舐める犬であったが、夫は可愛がっていた。妻の入院時に犬の行き場所を探したがなかなか見つからなかった。

事例2　90歳代男性と精神障害の息子の二人暮らし。90歳の女性は、若い頃には医療関係の仕事を長くしてたが、晩年はブリーダーになり、自宅で猫、犬を飼い始める。男性が高齢で動物の飼育が出来なくなり、自宅はゴミ屋敷化、地域からも苦情が出ていたが、人との交流を好まなかったので、介入が難しかった。
男性が動けなくなって自宅に介入。多数のゲージの中には、犬、猫の無数の死骸がそのままで放置されていた。男性、息子さんは入院となった。

【アンケートと事例から見える課題】
ケアマネジャーの声などから、多頭飼育であると、介護のサービス提供に支障をきたしてしまっていること、多頭飼育されている場合、高い確率でゴミ屋敷と生活困窮も隣り合わせであることがわかりました。

当協働会議では、飼い始めのきっかけを考えると、もともと動物好きのパターンと若い家族が高齢者の癒しになればと渡すこともあるのではないかと考えます

高齢化がますます進み、寂しさを紛らわすための飼育もありがちです。また、高齢者だけではなく人とのコミュニケーションが苦手な方が多頭飼育に陥るケースも増えてくるでしょう。

福祉的な視点も重ねながらの、予防、啓発が必要であるとの意見を交わしています。

多頭飼育の発生構造

（人・動物・地域に向き合う多頭飼育ガイドライン
2021年3月環境省　17ページより抜粋・編集）

多頭飼育問題に陥るリスクが高い状態
非計画的な繁殖につながる可能性のある不妊去勢手術未実施の動物を飼育している、個体数が増加傾向にある等。

多頭飼育問題
多数の動物の飼育により
・飼い主の生活状況の悪化
・動物の状態の悪化
・周辺の生活環境の悪化
のいずれか、もしくは複数が生じている状態

個体数増加の要因
・動物の高い繁殖能力
・無責任な餌やり
・放し飼い
・(侵入個体の定着につながる)家屋損壊部の未修繕
・適切な繁殖制限措置(不妊去勢手術、雄雌の分別飼育等)の未実施

飼い主が個体数を増加させてしまう理由
・判断力の不足
動物の繁殖能力等に関する知識の不足、認知機能の低下など
・経済的困窮
不妊去勢手術の費用を負担することが困難
・信念、感情
繁殖は自然の摂理であり。生殖機能は奪いたくない、可哀想等

人にも動物にもやさしいまちに

滋賀県動物愛護推進員
こうか人福祉・動物福祉協働会議　代表　田中ヒロヤ

多頭飼育崩壊・・・犬や猫、ウサギなどを何頭も無秩序に飼って、異常繁殖の末に飼育できなくなる状態。

▼最近この言葉をよく耳にするようになりました。なぜこのような事が起こるのでしょう？

▼多い事例として・・・社会から孤立した高齢者が犬や猫の適正な飼育ができず、最終的に生活破綻に繋がる状態です。孤独感から動物への依存が強くなり、外で野良猫を見つけるたびに連れ帰る。オスとメスがいれば繁殖し、あっという間に手に負えなくなるほど増えてしまう。これは特殊なことでしょうか？

▼2020年9月時点で65歳以上の高齢者人口が3617万人、その内で独り暮らしが737万人。この内0・1%が多頭飼育者だとしても7千人。単純に割っても各都道府県に150人位、こうした傾向にある方がおられるという事です。

▼何もご高齢の方に限ったことではありません。コミュニケーションが苦手な方が動物に依存することは容易に考えられることです。コミュニケーションにハンディキャップを持った方が適正な飼育方法を知らないまま飼い始め、避妊去勢手術の必要性はもちろん、トイレを設置することも知らずに不衛生な環境で生活し、周囲にも気づかれないまま生活が破綻していく。

▼これは動物の問題だけではなく、飼っている人の問題です。そして孤独から引き起こされる社会の問題ではないでしょうか。

▼3年前から滋賀県と甲賀市、動物愛護団体、そして滋賀県動物愛護推進員で「こうが人福祉・動物福祉協働会議」を立ち上げ、官民が「他者を責めず、互いの得意分野を持ち寄り、問題解決に協力する」というモットーでこの問題に取り組んでいます。

▼コロナ禍の中、自宅で動物を飼いたい人が増えて今はペットブームです。何頭飼っていても適正に飼育ができていれば、何の問題にもなりません。地域で住民同士の繋がりがあって、困りごとを共有できていれば手を差し伸べることもできるはずです。お互い様の気持ちが当たり前のように根差す地域でありたい。例え近くでウイルスに感染された方が出たとしても、その方のために「お大事に」と優しい言葉をかけられる人でありたい。また「早く病気が治りますように」とそっと見守る地域にしたいと思う今日この頃です。

▼お年寄りや子どもにも、障害を持つ方にも、犬猫にも優しい社会は、全ての人にとって住みよい地域であることは間違いありません。

▼甲賀市が、滋賀県がそのモデルになることを願います。